

野鳥だより

—北海道—

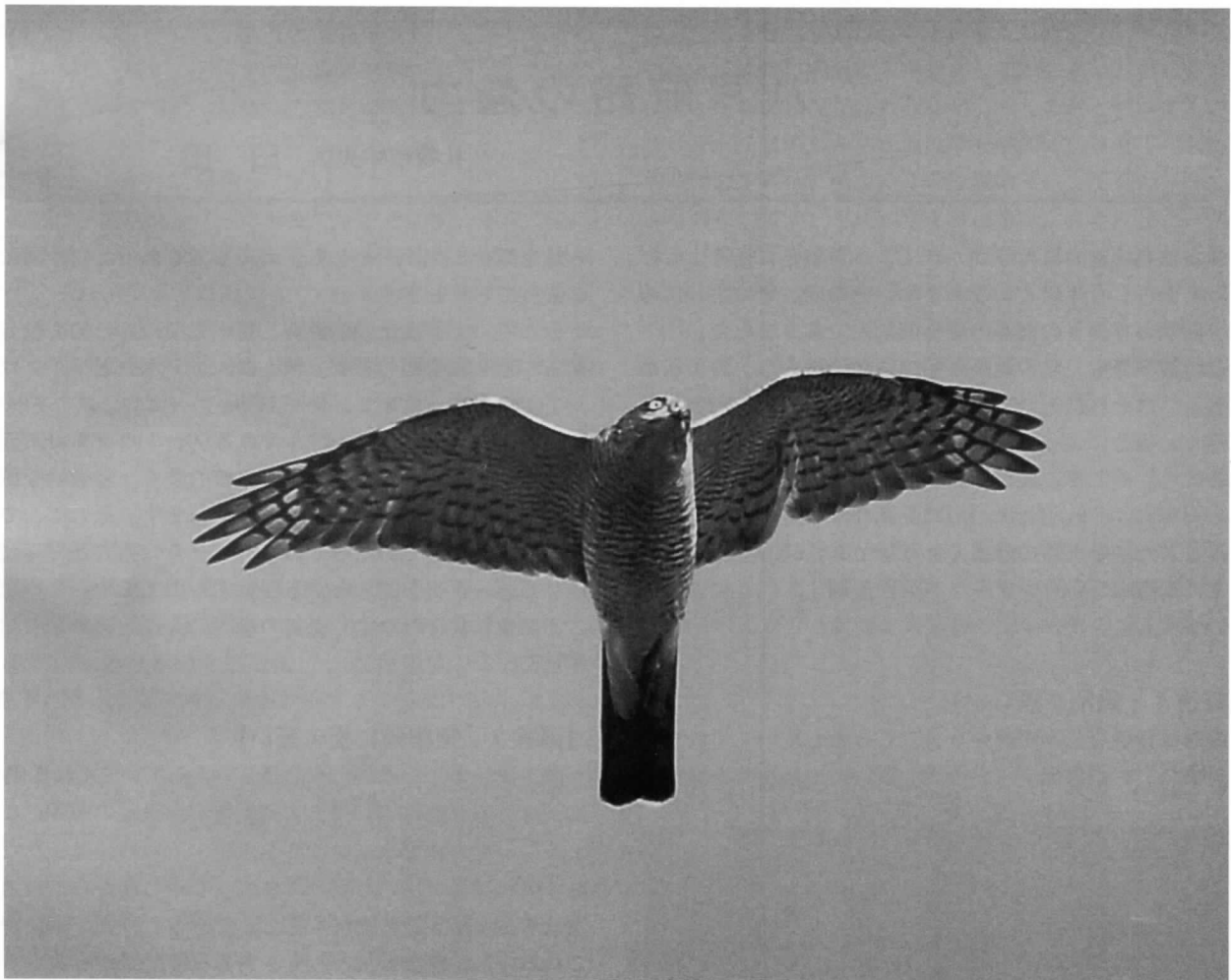
ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第155号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成21年3月21日

ツ ミ



2008.10.31 石狩川河口付近

撮影者 中正憲 佑 (札幌市西区)



も く じ

八戸航路の魅力	札幌市中央区 白田 正	2
[閑話] 野鳥あれこれ 「野鳥の北海道方言名」	札幌市北区 道場 優	3
勇払原野の保全について	(財)日本野鳥の会ウトナイ湖サンクチュアリ 原田 修	4
日本鳥類保護連盟—活動のご紹介—	(財)日本鳥類保護連盟 事務局	6
絶滅危惧種シマアオジをどう守るか(2)	ガンダロ・チャパツの黄色い鳥	
	北海道環境科学センター自然環境部 玉田 克巳	8
アカアシカツオドリの保護	ウトナイ湖野生鳥獣保護センター 加藤 智子	10
北海道におけるアオバトの繁殖期の分布	美唄市 藤巻 裕蔵	12
探鳥会ほうこく		14
鳥 民 だ よ り		15
宿泊探鳥会のお知らせ		15
探鳥会あんない		16

八戸航路の魅力

札幌市中央区 白田 正

私が海鳥の魅力にとりつかれて、八戸航路に通うようになってから、6年ほどになります。その間、年に約10回程度、四季おりおりの海鳥の姿を楽しんで参りました。

とは言っても、私の航路事始の頃の経験から、特に初めてもしくはそれに近い方にとって航路の探鳥は甚だとつき難く、場合によっては拷問に近い苦痛を伴うものかも知れません。そこで、航路探鳥において障害となるだろうことを列挙し、それぞれについて、私なりの対処方法を記してみました。それらの障害をクリアできた時、目の前の大海原に素晴らしいワンダーランドが展開することになると思います。

【障害1：識別が難しい】

海鳥は日頃なじみが薄いうえ、じっとしていてくれませぬ。また、いつ出現するか予測し難いため、片時も海上か



オオトウゾクカモメ

ら目を離せませぬ。そして、出現してもあつと言う間に飛び去ってしまいます。

そこで、まずは比較的識別し易い大型の鳥に的を絞って見ることをお勧めします。例えば、コアホウドリ、クロアシホウドリ、オオミズナギドリ、ハイロミズナギドリ、ハシボソミズナギドリ、フルマカモメ、トウゾクカモメの7種です。いずれも出現頻度が比較的多く、特徴的な識別ポイントが有り、特徴的な飛び方をします。そして、できたら事前に図鑑であたっておき、ベテランの方と一緒に乗船して逐一説明を聞きながら観察することです。こうすることにより割合たやすく海鳥の世界に入り込めるかも知れません。

【障害2：双眼鏡に捉え難い】

前述致しました通り、海鳥はじっとしていてくれませぬ。おまけに船も動いております関係上、双眼鏡の視野になかなか入ってくれませぬ。これを克服するためには、ただただ「慣れ」しか無いと思われませぬ。しかしながら、地上で空飛ぶ鳥を双眼鏡に素早く捉え、できるだけ長く追いかけて見るのも、練習方法として、ある程度効果が有るかも知れません。

【障害3：船が苦手である】

現に、私自身若い頃から船は苦手でした。特に、一時凝っていた船釣りの時には船酔いに大いに悩まされたものです。航路探鳥を始めた頃も、実を言うとなんかの「船酔い警戒モード」になっていたのです。ところが実際に乗ってみると船は大きく、路線トラックを輸送するためか、思ったより揺れませぬ。そのうち、繰り返し乗っているうちにすっ



ハイイロヒレアシシギ

かり慣れてしまい、少々シケでも平気になりました。ただ、一つだけ心がけていることは、体調万全を期して乗船していることです。どうしても自信の無い場合は、乗物酔いの薬を使用するのも有効な方法になると思われま

【障害4：体力に自信がない】

航路は、所要時間7～8時間です。その間、甲板で過ごすわけですから、鳥の出現が止まった時間帯など少々退屈です。また、甲板でただ立っているだけで意外に体力を消耗します。そこで、簡便なパイプ椅子を使用したり、甲板にて屈伸運動を行ったりします。が、一番の解決方法は割り切って船室に戻って仮眠をとることです。船内はいつも快適なエア・コンディションとなっていて、ゆったりと休養できます。

【障害5：寒い】

海上を走る船の甲板は、常に強風の吹きさらし状態です。そこでの体感温度は実際よりかなり低くなると思われま

た人も多いと思います。けれども私は、初心の方にとって最適の季節は夏であると思っています。前述した大型の海鳥が沢山出現してくれますし、海鳥以外の生き物を観察する機会にも恵まれているからです。例えばカマイルカのジャンプ、悠然と泳いで行くミンククジラ、ゆらゆら漂うマンボウ、波間を飛ぶトビウオなどです。ある年の7月のことでした。数百頭というカマイルカの大群が出現し、船の周辺でジャンプを繰り返してくれたことがあります。この時の群れは、ややしばらくの間、船を追尾して航跡で波乗りをしてくれたりして我々の眼を楽しませてくれました。

それから、夏以外の季節にも寒さに対する効果的な対処方法があります。それは何度も乗船した経験から分かったことなのですが、船に取り付けられている風向計により風向を把握し、常に風の裏に位置して観察することです。例えば冬場に多い西風の場合は、往路（八戸行き）は左舷、復路（苫小牧行き）は右舷といった具合です。すなわち、船体を風除けに利用するのです。これにより、信じられないほど甲板の状況が変わります。そして何と言っても、ミズナギドリ目の鳥たちが風の中を飛ぶ時に見せてくれる旋回時の急上昇は、船上のこの位置取りにして初めて味わえるものなのです。平成20年1月に乗ったときに見たコアホウドリの急上昇がそうでした。日頃は海面すれすれを優雅に飛ぶ鳥ですが、この時はビルの4F位の高さの甲板に立つ我々よりはるか上空まで舞い上がってくれたのです。なかなか見ることのできない青空を飛ぶコアホウドリの姿はしっかりと目に焼き付いています。

現在、苫小牧—八戸間には1日4往復のフェリーが運航しています。道央圏を拠点としたバードウォッチャーにとって、海鳥探鳥にはお手軽で充実した行程を提供してくれる航路です。たまには、日頃味わえない海鳥との出会いを求めて、のんびりと航海を楽しむのもいいものですよ。

【閑話】 野鳥あれこれ 「野鳥の北海道方言名」

札幌市北区 道場 優

探鳥会では、野鳥の名を言う時は和名で呼ぶが、道内ではノゴマは「日の丸」と呼び、フクロウは「ネコドリ」と方言で呼ばれているのを知っていますか？

鳥の北海道方言名については、あまり関心がないのか、北海道の図鑑には記述されていない。そこで興味を持って調べてみたら、これが意外に道内の各地でたくさん使われているのに驚いた。そこで今回はその一部として「あかげら（赤啄木鳥）」について紹介してみたいと思う。

アカゲラは語源辞典では「アケガラツツキ」の下略とあり、アカは雄の頭部赤色が目立つキツツキが名の語源である。北海道の方言ではアカフンドシ・ケラツツキ・

ケラと呼ばれている。アカフンドシは腹が赤いから名がつけられたらしい。ケラはケラツツキが略されたもの。さてケラツツキは元々（平安時代中期）はテラツツキと呼ばれていたのが、室町時代にケラツツキとなり、江戸時代の中期にはキツツキと呼ばれたと、その時代の辞書にある。そして現在の「きつつき」の総称となった。テラツツキは、民間説話にもあるように、物部守屋の霊が鳥になり、四天王寺を損壊させたので、“寺突き”と言ったという。このケラツツキは北海道方言のルーツ東北から入ったらしい。

勇払原野の保全について

(財)日本野鳥の会ウトナイ湖サンクチュアリ 原田 修

(財)日本野鳥の会(以下「野鳥の会」)がIBA(Important Bird Areas 重要野鳥生息地)保全事業の一環として、ウトナイ湖サンクチュアリを中心に進めているウトナイ湖・勇払原野保全プロジェクト(勇払PJ)について紹介します。

勇払PJとは

勇払原野は北海道三大原野のひとつとして、釧路湿原、サロベツ原野と並び数えられています。約3万6千haの原野を構成する湿原の面積は、過去50年で著しく減少しているものの、残された自然環境は、ラムサール条約登録湿地であるウトナイ湖を含み、水鳥、草原性鳥類、絶滅危惧鳥類の生息地です。

一方同所では1960年代の高度成長期に、第三次全国総合開発計画の一環として苫小牧東部開発計画がスタートしました。しかしその後の社会情勢の変化により、当初計画の約1万700haの土地の多くが未利用地域として残され、また農地として開拓された場所が放置され原野化し、結果として鳥類の良好な生息地となっています。



チュウヒ

野鳥の会ではこの優れた鳥類の生息環境を将来にわたって維持していくために、2000年度から当該地域において実施した鳥類調査から社会環境等も考察し、2005年に「ウトナイ湖・勇払原野保全構想報告書」を発行しました。現在はこの保全構想に基づき、特に苫小牧東部開発地域(以下「苫東」)内にある弁天沼周辺の保全を中心に、関係者への働きかけを行っています。

弁天沼周辺の現状

弁天沼周辺は、苫東内にありながら、絶滅危惧鳥類が25種類も記録される(表1参照)等、豊かな自然環境が残されています。そして安平川をはさんで反対側に位置する、いすゞ自動車の工場南側の湿性草原(以下「いすゞ南草原」)は、旧安平川の氾濫原だった場所で、絶滅危惧種のシマアオジやチュウヒ、アカモズなどの繁殖地です。

2007年4月に安平川河川整備計画検討委員会(北海道主催)では、安平川の洪水防止対策として、下流部の弁天沼周辺の1,500haを遊水地とする計画を合意しました。遊水地の区域は、現在の地形を生かし築堤や掘削等の新たな土地造成をほとんど行わないため、洪水防止と自然環境保全を両立させた、優れた計画といえます。何より、希少種の生息環境が工業開発地域から外れることで、保全の担保となります。

しかしこの遊水地構想に対し、地元経済界から反対意見が示され、道内部での調整により、2008年3月の同検討委員会では、当初案の3分の2となる約950haに縮小された面積で合意しました。現在は、遊水地の具体的な線引き(ど



苫東弁天地区の関係位置図

こを含めどこを外すか)や平常時の土地利用について地元関係者による協議会が立ち上がっています。

野鳥の会は2008年1月に道知事宛に要望書を提出し、遊水地構想に関し、①治水効果と原野の環境保全を両立させる計画にすること、②遊水地は現在の地形を生かしてできるだけ大面積で、湿地環境を保全すること、そして弁天沼一帯の絶滅危惧鳥類の生息環境を守るために、③弁天沼を中心とした低湿地を鳥獣保護区特別保護地区に指定すること、を要望しています。

鳥獣保護区については、まずは弁天沼の水面のみ普通地区に、という事が関係者により合意されています。しかし関係者が一堂に会した協議は一度も行われていません。調整機関である道の指導力が求められています。

また、2008年の繁殖期に7年ぶりに行ったシマアオジの生息状況調査では、弁天沼北岸では確認できず、いすず南草原でも激減していることが明らかになりました。シマアオジは1990年代半ばより道内各地で激減し、2006年には環境省により絶滅の危険度が2段階引き上げられました。タンチョウやオオワシを飛び越え、シマフクロウやヤンバルクイナと同格になっているのです。生物多様性の視点からも、いすず南草原等の重要性が高いことは明らかです。

表1 苫小牧東部開発地域 弁天地区で記録のある希少鳥類

No.	種名	種の保存法	文化財保護法	環境省 レッドリスト	北海道 レッドリスト
1	サンカノゴイ			EN	EN
2	オオヨシゴイ			EN	R
3	コウノトリ	国内希少種	特別天然記念物	CR	EN
4	マガン		天然記念物	NT	R
5	ヒシクイ		天然記念物		R
	(亜種ヒシクイ)*			VU	
	(亜種オオヒシクイ)*			NT	
6	ミコアイサ				VU
7	ミサゴ			NT	VU
8	ハチクマ			NT	R
9	オジロワシ	国内希少種	天然記念物	EN	EN
10	オオワシ	国内希少種	天然記念物	VU	EN
11	オオタカ	国内希少種		NT	VU
12	ハイタカ			NT	VU
13	ケアシノスリ				R
14	ハイイロチュウヒ				R
15	チュウヒ			EN	VU
16	ハヤブサ	国内希少種		VU	VU
17	エゾライチョウ			DD	R
18	ウズラ			NT	R
19	タンチョウ	国内希少種	特別天然記念物	VU	EN
20	クイナ				R
21	ヒメクイナ				R
22	シマクイナ			VU	R
23	オオジシギ			NT	R
24	アカモズ			EN	R
25	シマアオジ			CR	R

CR：絶滅危惧ⅠA類，EN：絶滅危惧ⅠB類，VU：絶滅危惧Ⅱ類，NT：準絶滅危惧，DD：情報不足，R：希少種

(*環境省レッドリストは亜種によってランクがわかれているため亜種別に記述)

今後について

1995年に策定された苫東開発新計画の理念「豊かな自然環境と共生した開発」を名実ともに表すためにも、いすず南草原を含めた一帯を広く遊水地とすることが必要です。工場用地は苫東内に未利用の代替地がたくさんありますが、この場所で繁殖する絶滅危惧種の野鳥には、生息環境の代替地はありません。

絶滅危惧の複数種の鳥類生息環境が保全され、エコツアー等で自然観察が楽しめる工業地帯。実現すれば、苫東にとっては、他地域には見られない魅力として、企業誘致の大きな付加価値になるでしょう。野鳥の会では新年度より、弁天沼に生息するチュウヒの大がかりな生態調査を行う予定です。引き続き、いすず南草原等の遊水地地域の確保と一帯の環境保全について、関係者に働きかけていきます。

勇払PJの今後の動きは、以下のHPをご参照ください。

<http://www.wbsj.org/sanctuary/utonai/>



アカモズ



日本鳥類保護連盟 —活動のご紹介—

(財)日本鳥類保護連盟 事務局

☆はじめに

財団法人日本鳥類保護連盟（以下連盟）は野生鳥獣に関する科学的知識と鳥獣保護の精神を広く普及するために昭和22年に創設され、その後、昭和32年に財団法人として認可されました。設立から60年以上が経過し、その間、人と野鳥が共存できる豊かな社会を実現するために努力し、野鳥保護思想を普及するためさまざまな活動を展開してきました。その一部を紹介したいと思います。

☆愛鳥週間（バードウィーク）

愛鳥週を提唱し、定着させたのは連盟であることはご存じでしょうか？昭和22年4月10日にバードデーのつどいを開催したことが始まりで、昭和25年からはより活動を大きくするため5月10～16日を愛鳥週間としています。

現在では野鳥など野生の鳥獣を許可なく捕獲することはいけないこと（法律で禁じられている）であることは当然のこととなっていますが、終戦間もなくの頃は、野鳥を捕獲して食べたり、飼育して楽しんだりすることが当り前の時代でした。このような人と野鳥との関係を改善すべく「野生の鳥たちを自然の中で大切にしていこう」という野鳥保護思想を広く普及し、理解してもらうためにはじめられたのが愛鳥週間です。



野生生物保護功労者表彰式の様子

愛鳥週間の主要行事として「全国野鳥保護のつどい」を環境省、都道府県との共催で毎年行っています。つどいには、総裁である常陸宮同妃両殿下にご臨席をいただき、野生生物保護功労者の表彰式を行う式典のほか、年によって異なりますが、さまざまイベントが行われています。

第63回目の今年は、北海道釧路市で開催される予定です。詳細については未定ですが、一般参加の募集もしますので、是非、お申込みください。

☆子どもたちのための活動

連盟では子どもたちにも野鳥や自然は大切であること、また、自然を守る気持ちを育んでもらえるよう40年以上にわたり事業を行ってきました。その一部を紹介します。

「愛鳥週間ポスター原画コンクール」

全国に配布している愛鳥週間ポスターには、小、中、高等学校の子どもたちが描いた作品が使われます。全国に呼びかけポスターの原画コンクールを行って、都道府県にご協力いただくことで、毎年、8万件近くの作品が応募されます。厳しい審査を受け、この中から総裁賞1点が決定され次の年の愛鳥週間ポスターとなります。



第62回愛鳥週間ポスター

その他にも、全国の小・中・高等学校などが、野鳥をはじめとする自然・野生生物に親しむ活動を通じて、自然保護の精神を養うことを目的とし、野生生物保護活動の実績を発表する場を提供する「野生生物保護実績発表大会」を、毎年、開催（環境省共催）しています。

☆観察会の実施

年に10回程度、観察会を開催していますし、各地にある支部でも行っています。また、年に1回初心者向けの「てほどき野鳥ウォッチング」も行っています。これは、中高年向けの連続野外講座です。双眼鏡の使い方からはじめ、自然の中で野鳥を見ることで、野鳥や自然について関心を高めてもらえるようにしています。

☆愛鳥週間全国一斉テグスひろい

全国各地の水辺で釣りに使われたテグスが放置され、野鳥たちへの被害が報告されています。連盟では、このようなことをなくすため、毎年、愛鳥週間にあわせてテグスの回収活動を実施しています。対象は全国の釣りの行われている水辺です。バードウォッチングや散歩の合間など、ほんの少しでも結構ですので、被害をなくすためにご協力ください！啓発用のパンフレットもあります（詳細はHPをご覧ください）。

☆ヒナを拾わないで！キャンペーン

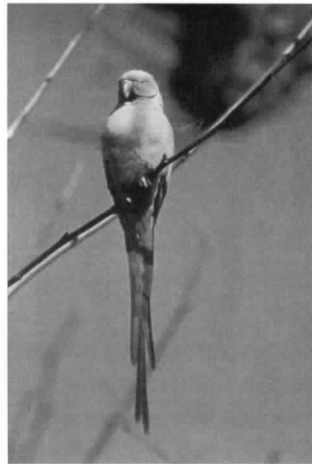


キャンペーン用ポスター

正しい対応を知ってもらうために「ヒナを拾わないで！キャンペーン」を実施しています。毎年、このポスターを配布しています（詳細はHPをご覧ください）ので、皆さんも是非呼びかけにご協力ください。

☆ワカケホンセイインコの調査

ワカケホンセイインコはホンセイインコの亜種で、本来インド南部やスリランカに生息しています。日本には飼い鳥として持ち込まれ、それが逃げ出すなど1960年代に入ってから関東地方などで野生化を始めたと考えられています。今まで関東のほかにも名古屋や大阪、新潟等でも記録があります。東京都では大田区にある大学構内にねぐらがあり、夕方になると1,000羽を超えるワカケホンセイインコが帰ってきます。



ワカケホンセイインコ

これらのワカケホンセイインコが冬場どのような餌に依存しているのか、ねぐらは1つなのかなど、生態系の中で在来種に影響を及ぼしていないか把握していかなければならないことがたくさんあります。また、原産国では農作物を荒らす害鳥として扱われているようですが、日本では害を及ぼしていないのでしょうか。ないとすれば、それはなぜでしょうか。それにより今後も害を及ぼす可能性がないかなど調べています。

☆愛鳥教育教材の販売

下敷き型の図鑑、通称、「野鳥シート」を販売しています。身近な鳥、水辺の鳥の2種類があり、イベントや学校

初夏になると「鳥のヒナを拾ったのですが、どうしたらいいですか？」という問い合わせが多く寄せられます。

しかし、そのほとんどが、まだ飛ぶ力がついていない巣立ち直後のヒナが地面におりているだけで、保護しなくてもよいケースです。

そこで連盟は(財)日本野鳥の会、NPO法人野生動物救護獣医師協会と共催し、正



水辺の野鳥、身近な野鳥

などで観察会を開催する際に重宝しているとご好評いただいています。また、「鳥630図鑑」はオールイラストで観察会指導者の方が説明の際に使いやすいと評判です。

☆皆様へのお願い

このように連盟では野鳥保護の思想を普及啓発するための活動を行っています。この他にも、中国に生息する野生トキの保護・増殖のため人工飼育施設への支援をする中国トキ保護観察団、中国トキ保護支援基金、また、学校などへ巣箱かけや観察会の指導を行っています。

[入会と寄付のお願い]

こうした活動を支えているのは会員の皆様からいただく会費や寄付、ボランティア活動によるところが大変大きいです。それでも足りない分は、官公庁からの受託事業を請負って事業費を賄っています。ぜひ、会員になっていただいで連盟の活動を支援くださいますようお願いいたします。会員の方には、会員証と年に10回「私たちの自然」をお送りしています。また、入会時には会員バッジ、わた然ファイルを差し上げています。この機会に是非ご入会ください。

また、連盟は「特定公益増進法人」に指定されているので、ご寄付をいただいた場合には、税制上の優遇措置があります。詳しくはお問い合わせください。

[古切手の回収]

使用済みの切手やカード類を収集して現金化し、活動資金として役立てています。皆さんも回収にご協力いただき、集まった古切手（切手は消印も含めて封筒から切り取ってください）は連盟へお送りください。

連絡、問い合わせは、(財)日本鳥類保護連盟

〒166-0012 東京都杉並区和田3-54-5 第10田中ビル3F

TEL : 03-5378-5691 FAX : 03-5378-5693

URL: <http://www.jspb.org/>



鳥630図鑑

絶滅危惧種シマアオジをどう守るか (2)

ガンゴロ、チャパツの黄色い鳥

北海道環境科学センター自然環境部 玉田 克巳

今回はシマアオジとはいったいどんな鳥であるのか、ということを紹介したい。しかしその前に、昨年2008年はシマアオジの保全対策が少し進んだ年であるので、そのことを冒頭で少しだけ触れておきたい。それは、IUCN（国際自然保護連合）のレッドリストが改訂され、シマアオジがVulnerable（環境省レッドリストのカテゴリーに従えば、絶滅危惧Ⅱ類に相当するランク）にランクアップされたということである。レッドリストについては、この連載のもう少しあとの方で、詳しく述べていきたいと考えているので、今回は詳述しない。しかし、前回の原稿の冒頭で、シマアオジの減少問題については、世論はあまり高くなく、マスコミ各社の取り上げ方も大きくないと書いた。今回の改訂は昨年の10月に行われたものであるが、この内容を紹介する報道機関はなく、私自身も、たまたま12月にレッドリストのホームページを覗きに行き知ったことである。IUCNがレッドリストのランクを上げたということは、国際的にも減少の実態が認知されたということである。シマアオジの減少が、越冬地や中継地に原因があるのではないかとささやかれる中で、IUCNのレッドリストに掲載されたことはシマアオジの保全を考える上で、大きな前進であると思う。

さて、シマアオジとは一体どんな鳥であるのか。図鑑を紐解けば、シマアオジの形態は「オスの夏羽は頭上、背、翼、腰が茶褐色で翼には大きな白斑がある。額、顔、喉は黒色。下面は鮮やかな黄色で、脇に茶褐色の縦斑がある。メスの夏羽は……」などとある。要するに顔^{ガン}ゴロで、茶^{チャ}髪^{パツ}の黄色い鳥ということになる。腹（下面）の黄色がひと際鮮やかで、草原でもよく目立つ。図鑑には鳴き声は「ヒーヒーヒーチョリチョリ」などと書かれており、言葉にすると素っ気ない表記になってしまうが、野外でこの声を聞くと、なんとも趣のある特徴的なさえずりである。私はシマアオジの巣を見たことはないが、文献では枯れ草の細い茎を使って外径15cm、高さ9cm程度の椀形のものを作り、産座は直径6.5cm程度、深さ4cm程度で、馬の毛や細い茎などを敷きつめるとある。一腹卵数は3～6卵で、

雌雄で抱卵するが抱卵時間はオスの方が短く、抱卵期間は11～13日間、育雛期間は13～15日間である。8月上旬に営巣地を離れ、8月下旬には完全にいなくなるとある（柿澤・小海途 1999, Masatomi & Kobayashi 1982）。漢字では「嶋青鴉」とか「島青鴉」などと表記され、北海道のアオジという意味である。漢字の示すとおり、国内では北海道だけに繁殖分布する。本州では、過去に青森県と秋田県で繁殖の記録がある。青森県の記録は三上ら（1977）に詳しい記述があり、これによると1976年6月6日に、むつ市金曲の休耕田において、シマアオジのオスのさえずり行動が観察され、6月22日に巣を確認し、雌雄が餌を運ぶ行動が観察されている。しかし6月26日には巣から約40m離れたところでオスのさえずり行動がみられ、給餌は行われず、1回目の繁殖は失敗したようであり、雛も確認できていない。その後、7月16日に、元の巣から350m離れたところで新たな巣が確認され、給餌行動が観察され、雛3羽が確認されている。しかし、ここでも7月26日に巣が空になっており、2回目の繁殖も失敗している。つまり、1976年の青森県では、2回の繁殖行動が観察され、それぞれ巣が確認されているが、繁殖は失敗に終わっており、厳密には繁殖記録とは言えないようである。秋田県の記録は西出（1987）に詳しい記述がある。1982年6月26日に八郎潟干

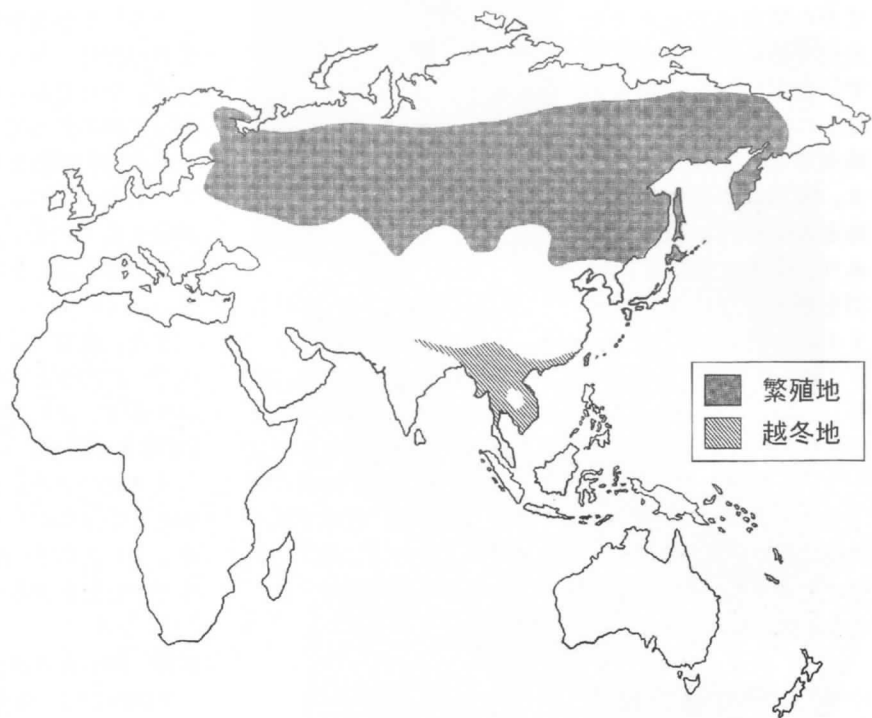


図1. シマアオジの世界分布。Byers et al. (1995) から作図

拓地の牧草地で生息が確認され、7月25日には雛1羽と無精卵1個の巣が確認され、7月29日に1羽の雛が巣立ちしたところまで確認されている。翌1983年にはオスの個体が3羽確認されているが、この年はこれ以上詳しい記述はない。

繁殖分布は世界的には広く、極東のカムチャツカ半島、サハリン、中国東北部などから、フィンランド中央部など、ユーラシア大陸の温帯から亜寒帯に広く分布する。越冬地は、中国南部、インドシナ半島、ネパール中東部、バングラデシュ、インド北東部などの東南アジア地域で、タイ南部や台湾には少ない(図1)。世界的には2亜種が記載されており、北海道に生息するものは亜種*Emberiza aureola ornata*で、サハリン、中国東北部、ロシア極東南部などにも生息する。基亜種*E. a. aureola*はスカンジナビア半島からカムチャツカ半島まで広く分布する(Byers et al. 1995)。Byers et al. (1995)という文献は、英語で書かれたホオジロ類の図鑑で、これによると、北海道に生息する亜種*E. a. ornata*は顔グロ(顔の黒い部分)が頭部まで広いのに対し、基亜種*E. a. aureola*は頭部の茶髪(茶色い部分)が嘴の近くまで広いとある。しかし、国内で撮影された写真図鑑(河井ら2003)をみると、基亜種*E. a. aureola*に似たオスの写真もあるので、形態から亜種を明瞭に区別することはできないと思われる。また、Byers et al. (1995)には、基亜種*E. a. aureola*のオス冬羽も記述されているが、顔グロ(顔の黒い部分)も茶髪(頭部の茶色い部分)も色が薄くなり、白髪(白っぽい羽)交じりの体色になる。亜種*E. a. ornata*の冬羽は、オスもメスも記述されておらず、おそらく区別がつかないものと思われる。従って、2つの亜種の越冬分布も同じ地域なのか、異なるのかはわからない。

北海道で繁殖するシマアオジは、渡りの際に、北海道から大陸に直接渡っているとする説がある。これは渡りの時期に、舩倉島などの日本海側の島嶼ではわずかに観察記録はあるものの、本州、四国、九州、沖縄では観察されないことから、考えられていると思われる。このことは先述の図鑑、Byers et al. (1995)にも記述されている。大陸の地形をみると、中国の東海岸付近は比較的標高が低くなっており、この低い地域は東西に狭く、南北に長く続いている。大陸では、この低地帯が鳥たちの渡りの重要なルートになっていそうであるが、実際にどのようなルートを渡っているのか、想像の域をでない。この大陸移動説(?)は古くから考えられており、小山(1977)にも記述がある。この小山(1977)によると、春の渡来時期、大陸を北上してきたシマアオジは、ウラジオストクあたりから最短で北海道に渡来するルート1と、大陸をさらに北上して間宮海峡からサハリンに渡り、南下して稚内から北海道に入ってくるルート2が考えられるというのである。この記事では、このような渡りルートを解明するために、各地の春の初認記録を教えてほしいと呼びかけている内容であった。つまり、ルート1ならば、初認記録は北海道の西側から東に向

かって並び、ルート2ならば北側から南に向かって並ぶから、渡りの謎に迫れるというものである。残念ながらどのような結果が集まったのかについては記述がないので、どちらの説が支持されたのかについてはわからない。しかし、昨今の渡り鳥の衛星追跡では、大陸を北上したハチクマが、朝鮮半島を南下して九州に渡ってきて、さらに直角に曲がって本州中部に到達するという春の渡りが明らかになって来ている(Higuchi et al. 2005)。シマアオジの春の渡りが、サハリンを南下するという説はいささか大胆な説であるが、あながち否定もできない。さらに大胆な渡りの説がある。これは日本鳥学会のある大会で、研究者仲間から聞いた話であるが、大陸の西側で繁殖する個体群は、秋の渡りの際に、一度極東地域などの東に渡ってきて、大陸の東側を南下するというのである。根拠もなにもない想像の域を出ない話であるが、大陸西側の繁殖地と越冬地を直線で結ぶと、中間にはヒマラヤ山脈が横たわることになる。ヒマラヤ山脈を避けているとすれば、もしかするともしかするかもしれない……。風が吹けば桶屋が儲かるような話で、いささか科学的な根拠には乏しい内容である。そこで、少し科学的根拠に基づくデータとして、鳥類標識調査(バンディング)の記録を調べてみた。1961年から1995年まで、国内では502羽のシマアオジに金属リングが装着され、放鳥されている。1973年から1986年までは、毎年20~30羽が標識放鳥されているが、これらの鳥の移動回収記録はなく(山階鳥類研究所 2002)、残念ながら今のところ移動経路を示す客観的証拠は何もない状況である。

文献

- Byers C, Olsson U & Curson J (1995) Buntings and Sparrows. Pica Press, East Sussex.
- Higuchi H, Shiu HJ, Nakamura H, Uematsu A, Kuno K, Saeki M, Hotta M, Tokita K, Moriya E, Morishita E & Tamura M (2005) Migration of Honey-buzzards *Pernisapivorus* based on satellite track. *Ornithol Sci.*4:109-115.
- 柿澤亮三・小海途銀次郎(1999)日本の野鳥 巣と卵図鑑. 世界文化社, 東京.
- 河井大輔・川崎康弘・島田明英(2003)北海道野鳥図鑑. 亜璃西社, 札幌.
- 小山政弘(1977)謎の渡去来コース シマアオジ. 野鳥42(3):160-161.
- Masatomi H & Kobayashi S (1982) Mating behaviour of the Yellow-breasted Bunting *Emberiza aureola*. *J. Yamashina Inst. Ornith.* 14:306-324.
- 三上直樹・杉山優子・扇谷照美・大八木昭(1977)下北半島でシマアオジが繁殖. 野鳥42(5):266-268.
- 西出 隆(1987)八郎潟干拓地の*Emberiza*属について. *Strix*6:86-95.
- 山階鳥類研究所(2002)鳥類アトラス. 環境省, 東京.

アカアシカツオドリの保護

ウトナイ湖野生鳥獣保護センター 加藤 智子

昨年(2008年)8月末にアカアシカツオドリが渡島支庁管内森町の漁港に飛来しました。北海道でアカアシカツオドリが確認されたのは初めてのことです。その鳥は衰弱していたようで、9月半ばには保護され、苫小牧市にあるウトナイ湖野生鳥獣保護センターに収容されました。飛来・保護、その後の経過などを同センターの獣医師である加藤智子さんに書いていただきましたので掲載します。

広報部

【アカアシカツオドリ】

- 分類 ペリカン目 カツオドリ科
学名 *Sula sula*
英名 Red-footed Booby
分布 世界の熱帯・亜熱帯の海洋に広く分布し、島で集団繁殖。国内では小笠原諸島、硫黄列島、南西諸島等にまれに飛来し、過去に数例の繁殖歴がある
- 大きさ 全長66~77cm 翼開長90~100cm
- 特徴 雌雄同色。体は白く、風切羽は黒い。目の周囲の裸出部と足は赤色。嘴は青灰色。解剖学的な特徴としては、潜水時に水の吸引をふせぐために、外鼻孔が存在しないことや、海水摂取による過剰塩分を排泄するための塩腺の存在等がある。
- 生態 小さな群れで行動し、空から水中に飛び込んで魚をとらえる。低木の樹上に枯れ枝で巣をつくり、1年中繁殖可能。
- RDB 絶滅危惧IB類

【保護にいたるまでの経緯】

2008年8月29日、北海道森町漁港、沿岸から300mほど沖で漁船に降り立つ。船から離れようとせず、漁船と共に漁港へ戻り、2週間近く漁船上で過ごす。この間、南方系に生息するアカアシカツオドリと判明。

9月10日から数日にわたり姿をみせないでいたが、9月15日再度同漁船へ戻ってきたため、翌16日関係機関を通じ環境省北海道地方環境事務所(以下、環境省と称す)に連絡し支持を仰ぐ。

報告を受け環境省は海鳥の専門家等と対応について相談し、個体の衰弱が疑われたことから、保護を決断。同日中に職員を派遣し仮収容したが、移送先である保護収容施設のウトナイ湖野生鳥獣保護センター(以下、保護センターと称す)が休館日であったことから、苫小牧市在住の海鳥の専門家(元保護センター救護職員)自宅内の収容施設で収容となる。

23時40分到着、直ちに外傷等の確認。異常所見は認めな

かったが、移送によるストレス等で脱水が懸念されたため、ブドウ糖5%液を経口補液し保温・安静処置を施し就寝させた。

翌17日、再度経口補液と強制給餌を行い経過観察。特に異常は無く落ち着きを確認し、13時、保護センターへ搬送収容。

【ウトナイ湖野生鳥獣保護センターでの保護経過】

1) 初診

2008年9月17日、搬送を受け、脱水を確認。緩和処置として経口補液を行うとともに、保温・安静処置を施す。視診・触診上、外傷認めず、便および血液検査での大きな異常所見も確認されなかったが、中期にわたり餌がとれなかったためか、衰弱状態にあり、体力回復を目指す。

2) 飼育管理について

～餌～

搬入を受けて約1週間、個体の容態は安定(写真1)。水をはった容器に魚を入れたり、魚を投げて動きをつけることで採餌を促す。しかし、アカアシカツオドリの自発採餌の有無は日によって異なるため、体重の維持管理を最優先とし、強制給餌を取り入れることとした。

餌の種類は、シシャモ・タラ(切り身)・サンマ(1/2



写真1 アカアシカツオドリ

サイズ)・イカ(切り身)チカ・キュウリウオ・わかさぎ・イワシ等を用いた。体重を1,500~1,600gに維持(1日1回体重測定)するように、餌の量を設定。体重の約10%となる150g前後の魚を、1日2回にわけて給餌を行った。

～管理環境～

管理環境は、北海道が冬期に入るため、屋外ゲージでのリハビリは断念。本種は、南方系に生息している鳥のため、気温の低い環境に置くことは、個体への負荷が強いと考え、室温18~20℃に設定した室内での飼育とする。夜間はゲージ(大型犬用バリケン:幅69cm×奥行き101cm×高さ75cm)内(写真2)に収容し、日中は室内に止まり場を設け、ゲージフリーとすることで、身体ストレスをあたえず、自由な羽ばたき行動をうながす。アカアシカツオドリは1日に数回、力強く羽ばたく行動をみせる。室内は無風のため、飛び立つことはなかった。また、穏やかな気性の個体であったため、一定の止まり場から離れて、自由に動き回る行動はみせなかった。



写真2 夜間収容風景

3) 健康管理について

センター搬送時、アカアシカツオドリの体全体に、淡褐色な汚れを確認。油等の人工的な汚染物によるものではないと判断し、搬入から約1か月後の10月15日に、体調が万全な状態で洗浄を行った。(写真3)。

また、定期的な便検査を行うも、便の状態はいたって良好で、寄生虫等の出現は確認されなかった。時折、水鳥によくみられる給餌後の魚の吐きもどし行動も認められたが、健康に影響するものではなかった。

4) リリースについて

この北海道では、アカアシカツオドリの生息域と距離が離れているため、道内でのリリースが困難であった。健康状態が安定している状態で、生息域へ搬送し、リリースすることが最善の方法と考え、南方地方への移送計画を立てる。環境省と相談したところ移送の許可が下り、指示に基づき2008年12月16日沖縄県へ搬送。現在もおリハビリを

つづけている。リリース時期は未定であるが、尾羽の損傷回復(換羽期)待ちと、同種海鳥の飛来に合わせ、今春以降のリリースを目標としている。



写真3 洗浄中

【本症例の要点】

① 餌の対策

生息地での採餌行動(水面への飛び込みトビウオ、イカ等を採餌)と同様な環境を作り出すのは困難であったが、常に水を設置し、餌を与える際は、魚をちらつかせたり、投げる等、動きをつくり自発採餌をうながした。また、生息地での魚を確保することが困難であるため、近海でとれた新鮮な魚を、種を限定せず様々な魚種を用意し、これに対応した。

② 人慣れへの対策

もともと、人間の生活圏の中で生息することがない種の鳥のため、管理下に置かれても、人への警戒反応もみせることはなかった。そのため、人慣れを起こさないよう、アカアシカツオドリの接触には配慮を要した。

③ 管理環境

海への飛び込みや、長時間の飛翔などの生態を補う環境づくりは困難であった。これを補うために、自由に羽ばたきことができるゲージレストでの空間を提供した。また、外気温が低くなる季節にあたったため、屋外での管理は断念。室温22℃、湿度50%以上を維持した室内での管理とした。

④ 移送の対策

12月16日~17日、2日間にわたり、北海道から沖縄県へ飛行機および連絡船での移送を行った。個体への負担を少なくするために、移送用ゲージ(トラベルキャリー:幅40cm

×奥行き70cm×高さ50cm) 底部に、特殊ネットを使用したハンモック形態保護具を設置。体重分散と排便時の体部の汚れを抑えるための対策としての使用である。また、移送前にあらかじめブドウ糖の経口投与を施す。移送中の振動・騒音等によるストレス反応による血糖値の減少を予防するための緩和処置として行った。

⑤ 長期ケアに予測される疾病への対策

(1) アスペルギルス症

アスペルギルス症とは、アスペルギルス属 (*Aspergillus fumigates*) の真菌による感染症の一つである。この真菌は、土壌や空気中など生活環境に広く分布しており、免疫不全に陥った鳥類の肺・気管支・気嚢内で増殖し、呼吸器症状を発症するケースが多く、完治が困難な感染症で、長期ケアの鳥類に危惧されている。アカアシカツオドリも、3ヶ月にわたる屋内管理となったため、免疫低下をひきおこさぬよう、ストレスを最小限に抑え、日々の健康管理を綿密に行った。このリハビリ期間では、本症を疑うような呼吸器症状を認めることはなかった。

(2) バンプルフット症 (趾瘤症)

海鳥の多くは、生涯の大半を洋上で生活するため、脚に負担がかからない生活をしている。そのため、室内での飼育は、足裏に負担をかけやすく、バンプルフット症 (趾瘤症) 発症のリスクが高まる。これを阻止するために、日々、足裏のチェックを行い、発症素因がないかを確認。また、止まり木の素材 (表面が粗剛ではないか、滑りすぎないか) を重視したり、止まり木上でのアカアシカツオドリの姿勢

をよく観察することで、体重が均等に分散されているかの確認につとめた。

【さいごに】

「アカアシカツオドリ…」名こそ知っているものの、実際に目にするのも、触れるのも初めて、身近に生息している種ではないだけに、当初は戸惑いがありました。しかし、この3か月間を共有できたことは私にとって、学びの多い日々でした。日頃よく目にする種、初めて出会う種、これからおそらく出会うことのない種、どれも「ケア」を行うスタンスは何も変わらず、今、ケアする相手は何を考え、何を求めているのかを読みとり、最善策を見出していく大切さにあらためて感じることができました。

また、アカアシカツオドリのリハビリには、日本野鳥の会苫小牧支部をはじめ、野生動物救護研究会、沖縄県獣医師会、東海大学海洋研究所等多くの専門家の方々にアドバイス・支援いただいたことをここに感謝申し上げます。

【参考資料】

- ・日本動物大百科 鳥 I (平凡社)
- ・野鳥の医学 (どうぶつ社)
- ・野生動物ファーストエイドガイドブック II (日本小動物獣医師会)
- ・野生動物の医学 (文永堂出版)
- ・野生動物の看護 (文永堂出版)
- ・Avian Medicine (Inter Zoo)

北海道におけるアオバトの繁殖期の分布

美唄市 藤 巻 裕 蔵

本誌154号に北海道におけるキジバトの繁殖期の分布について述べた。今回はアオバトの分布・生息状況についてキジバトと比較しながら述べる。調査方法、使用したデータ、まとめ方については、キジバトの場合と同じなので省略する。2007年までに調査した区画 (5×5 km) の数は784、調査路数は882である。分布と全体の出現率 (調査した区画に対するアオバトが観察された区画の割合) については全てのデータを用いたが、生息環境別と標高別の出現率 (全調査路数に対するアオバトが観察された調査路数の割合) については上記の区画と調査路で調べた結果だけを用いた。

分布

図1に、10km四方の区画を単位として繁殖期のアオバトの分布を示した (観察結果は5×5 kmの区画で記録しているが、図が細くなるので10km四方で表示)。分布図を見ると、アオバトの出現率は45%で、キジバトの83%に比べてはるかに低い。またアオバトは平野部にも山間部にも生息しているが、平野部では観察されていない区画があり、

キジバトが平野部で広く生息しているのに比べると、平野部の分布は疎である。ただ森林のない海岸沿いの区画や日高山脈の稜線部にあたる区画では記録されていない所もあり、この点はキジバトと共通するところである。

生息環境

生息環境別に出現率をみると、アオバトはハイマツ帯では観察されておらず、常緑針葉樹林で39%、針広混交林で33%、落葉広葉樹林で47%、カラマツ人工林で39%で、落葉広葉樹林でやや高いものの、森林のタイプの違いによりそれほど大きな差はない (表1)。しかし、いずれのタイプの森林でもキジバトの半分近い値である (表1)。森林以外の環境での出現率は、農耕地・林で26%、農耕地で12%、住宅地で6%とキジバトの場合の1/4~1/7で、両種の出現率の違いは森林におけるよりも大きかった。このように、キジバトが森林のほか農耕地にもごく普通に生息するのに対し、アオバトはおもに森林に生息し、農耕地や住宅地にはほとんど生息しない。また、ラインセンサスでは遠くから聞こえてくる声だけが記録される場合がほとんどで、調



図1. 北海道におけるアオバトの繁殖期の分布

一つの区画は約10km四方で、1/25,000の地形図に相当する。

●=生息が確認された。○=調査したが観察されなかった。・=未調査。

査路の片側25mの範囲で記録される例はまずないので、調査結果の個体数はかぎりなく0に近い。同じ森林性の鳥とはいっても、キジバトに比べると、アオバトでは出現率・観察個体数とも少なく、生息数が少ないことを示している。

両種とも食物は植物質であるが、キジバトはおもに穀類・種子食なので森林のほか農耕地にもよく飛来すると考えられるが、アオバトはおもに果実食なので、食物の少ない農耕地にはほとんど飛来しないのであろう。

標高別の出現率については、観察された森林と農耕地でみると、200m以下では28%、201~400mで32%、401~600mで34%、601~800mで19%、801m~で4%で、標高600mまでは標高が異なってもあまり差がなかったが、標高601m以上では急に低くなった。キジバトの出現率が標高に比例するように徐々に低くなったのと比べると、アオバトでは高い標高で急に低くなる点が異なっている。図鑑などでは北海道のアオバトは平地から標高400mくらいまで生息するとされているが、今回の結果を見る限りでは標高600mくらいまでは平地と同程度に生息していると言うことができ、

1960年代後半に黒田らが大雪山で行った調査の結果によると、標高1200~1500mでもアオバトが記録されている。

まとめ

アオバトは北海道全域にほぼ一様に分布しているが、キジバトに比べて生息数は少ない。おもに山間部の標高600mまでの森林に生息し、これ以上の標高では急に少なくなる。平野部では森林があってもあまり生息せず、農耕地のような開けた環境や住宅地にはほとんど飛来しない。このような分布・生息環境特性をみると、アオバトはキジバトほどポピュラーな鳥とは言えない。

表1. アオバトの生息環境別・標高別の出現率 (%)

生息環境	調査路数	標高 (m)					全体
		~200	201~400	401~600	601~800	801~	
ハイマツ林	12	—	—	—	0	0	0
常緑針葉樹林	18	63	33	0	33	0	39
針広混交林	154	42	41	35	20	7	33
落葉広葉樹林	185	53	50	24	0	0	47
カラマツ人工林	23	33	36	67	—	—	39
農耕地・林	223	28	19	29	0	—	26
農耕地	260	12	7	0	—	—	12
住宅地	33	3	0	50	—	—	6



野幌森林公園
2008. 12. 7

【記録された鳥】トビ、オジロワシ、ハイタカ、ノスリ、フクロウ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、モズ、ツグミ、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アトリ、マヒワ、ウソ、ハシブトガラス 以上23種



モズ 12月の野幌探鳥会では初めての記録です。
(この写真は野幌森林公園のものではありません)

【参加者】阿部真美、伊藤裕美、今村三枝子、大坂博記、栗林宏三、後藤義民、小西美美枝、小堀煌治、小松正幸、白澤昌彦、田中 洋・雅子、田上政義、田上、武沢和義、辻 雅司・方子、戸津高保、富川 徹、道場 優、中正憲信・弘子、蓮井 肇、畑 正輔、浜野チエ子、平野規子、広木朋子、辺見敦子、松原寛直・敏子、横山加奈子、吉田慶子、吉中宏太郎・久子 以上34名

【担当幹事】白澤昌彦、武沢和義

小樽港
2009. 1. 18
札幌市北区 二反田公仁子

昨年に引き続き小樽の探鳥会に参加させていただきました。少し早めに集合場所に着きたいと出かけたつもりでしたが、みなさんととても早い集合でピリに近い方でした。小樽に着くまでのバスの中で幹事さんから「感想文」の依頼があったときは快くお引き受け下さいという案内がありました。マサカ、マサカ自分だったとは!!!快くお引き受けしない訳にはいきません。(すばらしい幹事さん)

生れ育った所が十勝の大平原の中、毎日小鳥の声の中の生活でしたが、水鳥を見る機会は少なかったと思います。カンムリカイツブリの冠にみとれ、マガモのきれいさにウツトリ、オジロワシの悠然さに感心し、とても良い一日でした。そして会員の皆様の鳥好きの気持ちが伝わり、とても良い雰囲気の中で沢山の野鳥にあうことができました。鳥のことは何も解りませんが、野鳥と探鳥会をととても楽しんでいる会員の皆様の観察させて頂きました。最後になりましたが、快く仲間に入れて下さいました会員の皆様、そしてお世話下さいました幹事さんありがとうございました。

【記録された鳥】ハジロカイツブリ、アカエリカイツブリ、カンムリカイツブリ、ウミウ、ヒメウ、マガモ、カルガモ、スズガモ、シノリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、トビ、オジロワシ、ハヤブサ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ワシカモメ、シロカモメ、カモメ、ウミネコ、ウミガラス、ハシブトウミガラス、ウミスズメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ツグミ、ベニヒワ、スズメ、ムクドリ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上33種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、井上公雄、岩崎孝博、内山純一・雅子、梅木賢俊、大坂博記、大橋 晃、景安則子、蒲澤鉄太郎、北山政人、蔵前 徹、栗林宏三、佐伯武美、坂井伍一・俊子、佐藤香代子、佐藤優子、品川睦生、清水朋子、白澤昌彦、鈴木麻美、高栗 勇、高橋きよ子、高橋良直、田中 洋・雅子、道場 優、戸津高保、中正憲信・弘子、二反田公仁子、浜野チエ子、濱野由美子、樋口孝城、平野規子、広木朋子、松原寛直・敏子、山田良造、山本昌子、吉中宏太郎・久子 以上45名

【担当幹事】白澤昌彦、道場 優

野幌森林公園
2009. 2. 1

【記録された鳥】トビ、オジロワシ、ハイタカ、オオタカ、フクロウ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、マヒワ、ウソ、シメ、ハシブトガラス 以上23種

【参加者】赤沼礼子、石神直登・美代子、今村三枝子、鶴飼康子、生越武子、後藤義民、小西美美枝、小松正幸、栗林宏三、佐々木容子、品川睦生、白澤昌彦、高田直紀、滝藤由貴、武田つぐみ、竹田芳範、辻 雅司・方子、対馬洋子、戸津高保・以知子、蓮井 肇・敏恵、広木朋子、辺見敦子、本間義久、真壁スズ子、松原寛直・敏子、山本昌子、横山加奈子 以上32名

【担当幹事】松原寛直、横山加奈子



鳥民だより

◆総会のご案内

日時 平成21年4月10日(金)午後6時30分

場所 かでる2・7 320会議室

総会終了後に懇親会を予定しています。会員の皆様、多数ご参加下さい。

◆野鳥写真展と写真募集のお知らせ

<野鳥写真展>

期間 平成21年4月28日(火)～5月10日(日)

場所 光映堂2階ギャラリー
札幌市中央区大通4丁目

電話 011-261-0101

なお、展示作業は4月27日の午後6時から、撤去作業は5月10日の午後5時から行う予定です。お手すきの方はご協力願います。また、出展者は写真展終了日以降、できるだけ早く出展写真を引き取りに来てください。

<写真募集>

写真は原則として道内で撮影したもので、サイズは四つ切、デジタル写真はA4版。鳥の名前、撮影者、撮影年月、撮影場所を添付して下さい。送付は光映堂の小林店長まで。4月27日に直接持参する場合は事前に連絡願います。出展者には光映堂の本店と地下街店で使える商品券(2,000円分)を進呈します。

問い合わせは 小堀煌治

011-591-2863 (午後7時～10時)

◆平成21年度会費納入のお願い

この号(第155号)と一緒に郵便振替用紙を入れてあります。速やかな会費納入をお願いします。

◆住所変更の場合にはご連絡を!!

「野鳥だより」送付先住所が変更された時には速やかにご連絡願います。

◆「野鳥だより」の原稿を募集しています。

普段探鳥をしている場所の紹介、珍しい鳥の観察記録、野鳥保護についての意見、随筆など、野鳥に関するものであれば内容は問いません。また、掲載記事のご希望、原稿を書いてくれそうな人のご紹介も是非お願いします。連絡・問い合わせは以下まで。

広報幹事 樋口孝城

住所：札幌市北区拓北5条2丁目10-17

電話：011-771-4470

E-mail：higuchi@hoku-iryu-u.ac.jp

【新しく会員になられた方】

佐藤香代子 札幌市西区

— 宿泊探鳥会のお知らせ —

サロベツ・ベニヤ原生花園

宿泊探鳥会は平成12年(2000年)に愛護会発足30周年を記念して始まりました。その第1回がサロベツ・ベニヤ原生花園でした。それから10年、第10回目の今年、再びサロベツ・ベニヤ原生花園を訪れます。10年前の7月1～2日、43種類の鳥が確認されました。ほとんどが草原環境ですから種類はそれほど多くはなりませんでしたが、ツメナガセキレイやシマアオジが普通のように見られたのが何と言っても素晴らしいことでした。さて今年はどうでしょうか。シマアオジに会えるでしょうか。会えたらいいですね。

今回は幌延町在住の動植物写真家である富士元寿彦さんがガイドをしてくれます。富士元さんについては、「原野の鷺鷹」<北海道サロベツに舞う>などの秀逸な写真集、そしてテレビの自然番組などでもお馴染みのことと思います。いろいろなお話を聞くことができるのも楽しみの一つです。

以下の要領で行いますので、どうぞご参加下さい。

月 日	7月4日(土)～5日(日)
集合場所	札幌駅北口「鐘の広場」
集合時刻	4日午前6時30分
札幌帰着	5日午後6時30分頃
定 員	40名
参加費用	16,500円 (交通、宿泊、食事などすべて込み)
宿 泊	豊富温泉ニュー温泉閣ホテル (電話0162-82-1243)
申込み先	蒲澤鉄太郎 電話 011-663-9783 4月12日午前9時から電話で受け付け、定員になり次第締め切ります。

探鳥場所

- ・1日目(4日)
サロベツ原生花園、幌延ビジターセンター周辺、長沼、三日月沼など
- ・2日目(5日)
豊富温泉付近、ベニヤ原生花園、クッチャロ湖など

☆食事は4日昼食から5日昼食までです。

☆1日目夜には懇親会を予定しています。

☆2日目には早朝探鳥(自由参加)ができます。



- ☀ 探鳥会は悪天候でない限り開催します。
- 👓 双眼鏡などの観察用具、昼食、筆記具、野鳥図鑑などをご持参下さい。
(探鳥地や当日の天候に応じて、防寒衣、雨具、長靴などをご用意下さい。)
- 🚶 公共交通機関を利用される場合には、事前に時刻・時間などをお確かめ下さい。
- ★ 千歳川探鳥会が午前8時からになりましたので、ご注意ください。
- ☆ 探鳥会の問い合わせ
(社)北海道自然保護協会 ☎011-251-5465 午前10時～午後4時(土・日祭日を除く)

開催日	探 鳥 地	集合場所及び集合時刻
4月12日(日)	モエレ沼	ガラスのピラミッド前、午前9時30分
	地下鉄東豊線環状通東駅から中央バス北札幌線東69番・東79番、モエレ公園東口下車徒歩15分。モエレ沼公園内を歩きながら沼の水鳥群、沼畔湿地草原の鳥、林のカラ類などを楽します。	
4月19日(日)	宮島沼	湖畔、午前10時
	JR岩見沢駅前発、又はJR石狩月形駅前発、中央バス(月形行又は岩見沢行)「大富農協前」下車、徒歩10分。マガンたちは北帰途中宮島沼に集結。湖面で羽を休め、えさ場を行き来する姿は壮観です。	
4月26日(日)	野幌森林公園	大沢口、午前9時
	JR新札幌駅発 夕鉄バス「大沢公園入口」下車、JRバス「文京台南町」下車、徒歩各5分。芽吹きが進み、夏鳥たちがほほ揃って、森が生き生きとしてきました。深呼吸をしながら進みます。	
5月6日(水)	藤の沢	白鳥園、午前9時
	定鉄バス札幌駅又は地下鉄真駒内駅発(定山溪行又は豊滝行)、「藤野3条2丁目」下車、徒歩10分。水辺もあって、どんな鳥が現れるか期待しながら、白鳥園の裏山(マナスル)を巡ります。	
5月10日(日)	野幌森林公園	大沢口、午前9時
	交通機関は、4月26日の案内を参照してください。 夏鳥が勢揃い。木の間に見え隠れするキビタキや、梢でさえずるオオルリなど魅力いっぱいです。	
5月17日(日)	千歳川	さけますふ化場手前の橋付近の広場、午前8時
	交通機関はありません。自家用車の相乗り希望の方は幹事に相談してください。 千歳川沿い道は自然の宝庫。水辺の鳥、草原の鳥、林の鳥もと欲張って、ゆっくりあるきましょう。	
5月24日(日)	鶴川河口	鶴川温泉四季の館 駐車場、午前9時30分
	札幌駅又は地下鉄大谷地駅発、道南バス浦河行(ベガサス号)、「四季の館」前下車。 鶴川河口の広々とした環境が魅力です。人口干潟のシギ・チドリや草原の鳥、また猛禽類が探しどころ。	
5月31日(日)	植苗ウトナイ	JR千歳線植苗駅、午前9時10分
	JR千歳線 植苗駅下車。 風が運ぶ草原の鳥の囁きを聞きながら湖畔へ向かいます。餌を運ぶ親鳥や、オオジシギのフライトも期待できます。	
6月6日(土)	平和の滝(夜の探鳥会)	平和の滝駐車場、午後6時30分
	地下鉄琴似駅発、JRバス(西野平和線)「平和の滝入口」下車、徒歩20分。 ヨタカ、コノハズクなどの声、遅くまで鳴くツツドリなど、夜ならではの探鳥です。懐中電灯、防寒衣、防虫薬の用意をお願いします。	
6月14日(日)	東米里	東米里小中学校正門、午前9時
	地下鉄菊水駅発、JRバス「東米里小学校前」下車。 かつてに比べ草地は少なくなりましたが、草原の鳥たちはやってきます。カッコウ、コヨシキリ、エゾセンニュウなどがにぎやかです。	
6月21日(日)	野幌森林公園	大沢口、午前9時
	交通機関は、4月26日の案内を参照してください。 鳥たちにとって一番忙しい、子育ての季節です。初夏の花たちも咲きそろい、目移りしそうです。	
6月28日(日)	福 移	福移小中学校前、午前9時
	地下鉄環状通東駅発、中央バス(北札幌線)「福移小学校通」下車、徒歩5分。 畑地、牧草地、河川敷草原で、ノビタキ、ホオアカ、コヨシキリなどを楽します。	

[北海道野鳥愛護会] 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より) 郵便振替 02710-5-18287
〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465
HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>